



【挨拶】

年 頭 に あ た っ て

日本禁煙科学会理事長 高橋裕子

2012年の年頭にあたり、ご挨拶を述べさせていただきます。

2011年はまさに激動の年でした。

3月11日の大震災と大津波は歴史上例をみない甚大な被害をもたらしました。私もひとりの医師として震災直後の被災地に入らせていただきましたが、被災地の状況は言葉に絶するものでした。それから9ヶ月。被災されたみなさまの苦しみは終わることがありません。2012年が大きな復興の年となってほしいと強く願わずにいられません。

被災地支援に関しては、本学会のみなさまのお働きはまことに迅速かつ多大であり、多くのご支援を賜りましたことを改めて感謝申し上げます。

震災直後から、日本禁煙科学会と連携している禁煙健康ネットのメーリングリスト(KK)を日本禁煙科学会の被災地支援用連絡網としての使用させていただいたほか、日本プライマリケア連合学会に協力しての被災地支援者派遣や、被災地入りする医療者のための海外文献翻訳プロジェクトにも60人近い皆様の大きなご支援をいただきました。本学会員のみなさまの志の高さを尊敬申し上げるとともに、衷心より感謝申し上げます。

さて、本年は健康増進法が制定されて10年にあたります。この10年の禁煙をめぐる社会の変化はめざましいものがあり、不可能と思われたことが可能になってきた10年でした。

例えば、2002年に和歌山県から始まった公立学校学校敷地内禁煙、2006年の大分県から始まった県内タクシー全車禁煙化などは、いずれも本学会の会員の多大なご尽力があって実現したものでありますが、当初はいずれも不可能と言われたものの、今や社会の標準となりつつあります。神奈川県に次いで兵庫県でも受動喫煙防止条例の制定に向けて動くなど、ゆっくりではありますが社会は禁煙化に向けて動いています。

そして昨年は、「赤ちゃんからはじめる禁煙活動」をテーマに、沖縄で第6回日本禁煙科学会学術総会を開催し、大盛會に終えることができました。これはまさに、年余にわたる沖縄の皆様の禁煙推進の輪の成果です。その成果はすべての年代層からの「禁煙川柳」文集という未来へつながる形で実しました。

学術総会では100歳を迎えた日野洞重明先生(聖路可国際病院)、北折一氏(NHKためしてガッテン)に講演いただきました。また、海外からも10名を超す研究者を迎え、赤ちゃんから100歳の高齢者までのすべての年代における禁煙の重要性と新たな知見に満ちた討議がなされたことは、まことに慶ばしいことでした。

社会は大きく禁煙に向けて歩んでいるとはいえ、まだ禁煙の道筋は途中であります。思春期喫煙や若い女性の喫煙問題のほか、FCTCにて定められた受動喫煙防止や価格値上げなど、私たちが取り組むべき課題はたくさんあります。

今年、平成24年。

日本禁煙科学会では分科会を設けてさまざまな問題の解決に取り組んできましたが、今年度は治療分科会から「禁煙談話会」が生まれます。

また、被災地のひとつ、岩手県盛岡にて学術総会を開催いたします。「イーハトーブの新しい風」のテーマも決まりました。今年は日本全体にとりましては大きな復興の年ですが、禁煙に関する知見がさらに集積され、多くの皆様が盛岡にご参集くださいますことを期待します。会員の皆様のご指導とご支援をお願い申し上げます。

会員の皆様にとりまして今年が昨年以上に幸多い年となりますことを祈念し、新年の挨拶とさせていただきます。